

# 県民との意見交換結果

現状、課題等に関する主な意見



## ① 居住

- 4、50年前に多く見られた大規模ニュータウンは条件がほぼ同じで、流通に出回る時期も重なるため売却価格を下げることで競争になってしまい、その結果、地域の物件価値まで波及し下がることになる。
- コロナ禍で周囲との交流や子どもが自然の中で遊ぶ場所が少ないため、移住したいと思う人が多いが、実際は地域の雇用不足などの理由で、移住できないという状況がある。
- 住む場所はどのような意味を持つのか。大学や会社に行くなど、住んでいる地域で過ごす時間はあまりない。利用するのは、主にスーパー、コンビニ、駅だけである。日本は人が住んでいるほとんどの場所には駅があり、スーパー、コンビニ、郵便局があり、公共交通機関がどこの地方都市にも整備されている。住む場所はあまり重要ではないのではないか。
- 住めば愛着湧き、離れたたなくなる。地元にいる時は地元が好きだった。三田市に住むと三田市に愛着が湧き、山がかわいく見えてくる。
- 私は大学生の時に起業し、実家のある西宮市から三田市に移住した。三田で起業した理由は、三田市に仲のよいおじちゃんがたくさん居たからである。知り合いが多く住んでいるから好きになるなど、起きることが面白い。
- 都会から若者が田舎に憧れて移り住んでくることがあるが、実際に住んでみてもすぐ出て行ってしまふ。町おこし協力隊が来て、お金だけもらって何もしないという人がいるという話を聞いたことがある。
- 町おこし協力隊として田舎に来て、そのまま住む人と帰ってしまう人は五分五分くらいいる。
- 田舎や都会に特化した暮らしがいいと言う人もいるが、多くの人は両方手に入りたいのではないか。

## ② 新規住民の受入れ

- 人口の減少、少子高齢化、担い手の不足などの問題がますます顕著になってきている。
- 参加者が高齢であるため、お祭りでだんじりが引けず、軽トラックで引いている。祭りの準備などの簡素化や他の地域からの応援、男性しかできなかった役を女性でもできるようにするなど、柔軟になってきた。
- 住みやすいだけの地域になっている。
- 子どもも徒歩圏内であれば、知らない人でも挨拶をしている。
- 近所の方が野菜を持ってきてくれる事がある。
- 集会所が小さく、自治会加入率が上がらない。
- 最近の移住者は地域でイベントを企画したり、村の役を引き受けてくれるなど協力的であるが、村の財産の管理に携わる役ができない地域もある

## ③ 仕事

- 三田市は都市部（大阪、神戸）への2ウェイアクセスでやや都会を匂わせ、また山間部を控え田舎的要素もあり、昨今の在宅勤務に最適な地域である。
- 働き方改革についてよく聞けがなかなか進んでいないという気がする。
- 川西市内で仕事がしたいという思いがあっても、働ける場所が少なく、大阪等へ働きに出ている状態である。
- 新型コロナウイルスの影響を受け、現在は会場参加とWeb参加のハイブリッド会議を運用している。Web会議は参加者の移動コストの削減、緊急時にはスピーディーな会議設営が可能である等多くのメリットがある。一方で、僅かながらタイムラグが生じたり、空気が共有しにくかったりと意思疎通の面ではまだまだ不足感があるというデメリットに直面している。
- 兵庫県の議会運営をみていると、まだまだ対面式で行われている。
- ハラスメントのない職場作りという議題で定例会をやった。今は会社でも行き届いていて女性がそういう目に遭うというのも考えづらくなってきていると思う。

## ④ 起業家への支援

- 猪名川町域の大半を占める市街化調整区域では、企業などの立地、起業が困難である。

## ⑤ ゆとり・いきがい

- コロナ禍で移動制限があるなかでもリゾートを求める。近くのホテルでちょっとした贅沢、非日常を体験できるとよい。阪神地域はそれができる。
- おうち時間が地元時間になる。
- 近所のママ同士が知り合いになれば、地域の情報がSNSでリアルタイムに入手できるため、自治会加入者が少ないと思われる。
- 時代の変化のスピードが速すぎて、人口比率の多い高齢者が変化を受け入れられず、大きく変化できない。
- 共働き世帯増加で自治会のために時間をさけない。
- 清荒神でテニススクールを運営している。リモートで仕事をするのは難しいが、利用者がリモートの間に上手くリフレッシュしてもらえたら嬉しい。クラブ活動に入っている子が少ない。放課後にアルバイトをしている学生に、「そんなにお金に困っているか」と聞くと、「ただ、遊ぶお金が欲しい」と言う。
- 地域で看取りをする活動（ホームホスピス）に取り組んでいる。自分らしく生きていけるまちづくり、繋がりづくりに携わっている。看取ることだけでなく、今やってみたいことをお互い応援し合おうよ、と言うようなこと。自由研究のように、虫の一生を調べたり育てたりする。
- 最近、夢を持っている若い人が少ないと感じる。

## ① 文化芸術

- 演劇活動の衰退と合唱活動の高齢化。（女性が9割）
- 地域活動の担い手、若手の減少が見られる。
- 集会場・稽古場・練習場の不足に、新たな発想展開が必要。例えば、アートビレッジ構想（練習村）長期間滞在型（絵画など大型200号以上）制作場所、楽器置き場付きオーケストラ・吹奏楽練習場、演劇練習など集団生活ができる練習場及び制作場など。
- 日本人が日本人でなくなりつつあるように感じる。日本古来の伝統、行儀作法などを子どもたちに教えることが大切。
- 芸術文化の愛好家の多くが高齢者のため、今回のコロナ禍により文化離れが進んでしまっている。
- 催しに多くの観客が来るようになったが、生活手段を芸術にすることや専門職としての場が多くない。
- 絵画造形系の専門家は多くない。
- 芸術系大学の活気がない。
- 大学との連携が必要である。
- 伝統や継承文化についての認知が希薄であり、実生活での必要性が感じられないという考えが感じられる。
- 心の遊びやゆとりについての教育が欠如しているように思われる。
- 地域や社会を構成する人間であることの自覚が薄いように思われる。
- 尼崎市では、祭りや寄り合いが減りつつある。
- 俳句にどのように興味を持ってもらうかといことを日々考えている。
- 県立芸術文化センターでは、本物のオーケストラを鑑賞できる。この地域には、そういった本物に触れ合う機会がある。
- 劇場には団体客より個人客が増えた。沿線価値を高め、歌劇を活かしたまちづくりや舞台技術の継承が課題である。
- 住宅街の中のアミューズメント施設として地域の理解を得る必要がある。

## ② 祭り

- 地域の祭りが減少している。
- 自治会の役員が高齢化している。

## ③ 人材育成

- 文化は人が生きていく上で必要という意識が行政内で薄く、後回しにされることが多い。
- 各種団体の活動活性化を図るため、各団体のキーパーソンへの支援や関係を深めると共に、活動補助対象の多様化を図る。

## ④ 教育

- 伝統や継承文化についての認知が希薄であり、心の遊びやゆとりについての教育が欠如している。
- 単身、子育て世代に自身と家族のため、健康のための食生活を伝える機会作りが困難である。
- 共に活動推進をしていく人材が増えない。
- 自然に関する指導者が減少している。
- 地域や社会を構成する人間であることの自覚が薄い。
- 大学に行くメリットは何か。学問や研究もだが、それ以外のことも意外と多いのではないか。
- 大学1年生になってからまだ一度も学校に行っていない。授業も一方的に見るという形である。他の人の意見交換や集まって自分の意見を述べ他の人の意見を聞くという学びをしたい。
- 大学は4年間でのどのような経験をし、自分がどのような成長をしていくのかということである。先生の話聞くだけで本当に大切なことが学べるのか疑問に思う。単なる知識であれば、YouTubeを見て得ることができる。このような時に、大学の真の価値は、自分のやりたいことを実現させるなどの行動であると考えて。生活に関することを放置し、自分のやりたいことに対してコミットできるというのが大学生活の面白い所である。だから、大学の中で友達や知り合いが完結するのは勿体ない。大学の外に出ることで、自分の会ったことのある大人、高校生の時に会えなかった社会人と接していくことができ、この点に大学の価値がある。
- 今までであれば大学に行っていない人より自分の方が上だと思っていたかもしれないが、実際はそうではなく、中卒、高卒関係なく賢い人は賢く、できる人はできるということを大学生活で学んだ。大学に行くことに大きな意味があるのではなく、世の中には自身の経験が重視される場合もある。
- 三田市には、自身の持っている知識や経験談、失敗談を語ってくれる大人が多く、学生に優しい。そこが三田市の住民の方々の魅力である。
- 西谷は「こども園」のモデル校になった。まちからわざわざ連れてくる親もいた。小学校の在籍人数は1クラス10名程度、いずれ廃校になるかもしれない。まちの人が小学校を選択でき、西谷の学校を希望する子の受け入れができたらい。新任の先生が赴任することが多く、熱い先生が多い。
- 食育活動を通じ、交流ができ、高齢単身の人に食事作りの実践を伝えることができた。
- 家庭教育の低下が青少年や若年層による多様な犯罪、非社会的行為などに影響し、根本的な人間関係構築を阻害すると考える。
- 妻が小学校のPTAの副会長をしており、小中学校の情報を知っている。学校では、不登校の子がいたり、いじめがあったりする。
- 子ども達は社会との接点が少ない。 「地域でこんなことができるよ」とか、中学・高校で起業してもいいという選択肢が示されることはほぼない。ほとんどの学生は何もせず就活を迎える。

- コロナ禍により子どもの遊びや外出が抑制されたことで、五感、身体全体で記憶する原体験が少なくなっている。
- 市内には大学がたくさんあり、当団体でも学生ビジネスアイデアコンテストというものをやっていて、学生からは非常に柔軟な発想やアイデアを聞く。

## ⑤ 環境・農業・食

- 里山の再生を行う団体は必ずその地域の住民が中心ではない。
- 「よそ者」の集まりであるので地域との温度差が生じる。
- 地域の人にとっては何のための活動なのか理解できない場合も多い。
- 里山が再生されることで復活した絶滅危惧種の盗掘が頻繁に起こっているため、保全活動の成果を十分にPRできない状況。
- 北摂里山の多くが市町の所有地であり、土地開発の際に取り残された斜面地にあるので、一般の立ち入りを禁止されている。来訪を促しにくい。（団体の活動日、開放日、イベント開催に限られている。）
- 里山は財産だが、人の手が上手く入り、加工して収入になるなど、生産性を生み出すようになれば人の意欲につながるのではない。
- 農業の持続可能な政策や他業種からの移転政策が必要である。
- 生物多様性の実現に取り組んでいる。
- 国道43号線の排ガスが気になる。
- 行政サービスは各市で異なるが、市民生活においては市境はほとんどない。今の市町単位では地域資源を有効に活用するうえで無駄な重複投資をしている。
- 私は本籍地が愛媛である。昔みかん畑だったところが現在は太陽光発電になっている。若い人はみんな外に出て働いているという状況だ。親が愛媛で柿畑をやっているのうちの会社で働きながら維持管理をして、365日休みなく働いている。小さい農地を兼業でやるのは現実的には難しい、山間部で大きな農業をやるのもなかなか難しい。そういった面で農地を守っていくというのは並大抵のことではないと感じている。
- 10年程前に建設業も暇な時期に農業をしたらどうかという内容の講演をされた方がいた。地方に行くとか仕事の無い時期に農業をして稼ごう、ということが全国的にあった。広島福山でそういうことに取り組んだ建設業者があるが、なかなか続かなかった。それと尼崎市の工場でも水耕栽培を始めたがやめた、というところがある。
- 空き工場で水耕栽培をやっているところがあるというのは知っている。建設業でもそのようなことを言われた時期があってちょっと頓挫して、なかなか農業をやるのは難しい。
- 空いた土地で農業をやりたい人は、孫に安心なものを食べさせたい、自分も元気になるという女性が多く、地域以外の人が入りやすくなっている。地元の直売所でも、キッチンやブルーベリー畑を貸してほしいとの要望もある。

- 三田市では野焼きが農家の方を中心に混乱を招いている。合法なのか違法なのか線引きができない。環境省への視察時に相談したら、「産業廃棄物を焼却してはいけない法律なので、農家の方は明確に免除されている」と言われた。風向きとか乾燥具合を考えて焼却しているが、中にはお構いなしに野焼きをする人もいるのも事実である。問題がおこり、一部の地域で刈り草をフレコンバック（工事用の大きな袋）に入れて回収しているところもある。今年は害虫が大発生したが、害虫と野外焼却との関連性は分からない。三田市が野外焼却についてガイドラインを発表しようとした時に、兵庫県から、禁止の要素を加えて策定してほしいと言われたと聞いている。
- 米や酒米が売れないという問題では、これから酒米が作れなくなるのではない。北海道では米の耕地面積が増えるうわさもあり、主食米が安くなっていくのではない。経費がかかり、価格が安いとなると、農家がたちゆかなくなり遊休農地が増えて大変だと思う。
- 国は2050年までに温室効果ガスの排出量をゼロにするという目標を立てた。また、2030年半ばまでには全ての新車を電気自動車に切り替えようという流れがある。これを受けて製鉄会社でも水素利用等によって低炭素化を図っている。日本のCO2の排出の40%を占めている火力発電については、国内の非効率な発電所を2030年までに休廃止するという決定がなされた。これにより水素やアンモニア、バイオマス、再生可能エネルギー等に注目が集まっている。これらの中でも期待の大きい水素については県内の企業が世界初の水素運搬船を開発した。また、県内には数カ所の大型火力発電所がある。神戸には2機、建設中の発電所があるが、地元との関係が難しいようである。
- 茶道で使われる炭（菊炭）を使う人が減り、生産者も減少している。萌芽を再生という成長過程で必要な木を切ることや煙が出る事に対して移住者の理解が得られない。
- 20年程前から鹿が急激に増え、新芽を食べられるため再生しにくい。
- 自分の山は管理できるが、山が放置されて持ち主の代が変わると境界が分からなくなり、売ることもできないこともある。木を切って利用することはできるが、植林や、鹿対策のフェンスを張るまではできず、山を管理する担い手がいなかったことが問題である。
- 農業で生計を立てるのは難しい。集落の9割が耕作放棄地になって荒れると周りに迷惑をかけるから百姓を続けている状況である。
- ビーマンは農協を通じて全て大阪に出荷される。流通経路が確立されて安定した収益が見込めるが、地元の人「三田ビーマン」知らない。
- 地産地消で、消費者に生産したものがすぐに届くというのが強みである。休耕地や畑があるので、若い人達に農業に触れてもらい新しい若手農業者を増やすことが課題である。
- 「地元の特産」と「観光農園」と「他の地域でも作っているものをたくさん生産する」のどこに力を入れるべきが悩んでいる。地域として、どこを推進しているのか。



## ① 結婚・出産・家庭

- 結婚している自分が想像できない。
- 10年後、結婚したり子どもができたりといったことが見えなく暗く心配。

## ② 見守り・子育て

- 都市部特有の少子高齢化、近隣付き合いの希薄化が進み、地域活動やボランティア活動が減少している。
- 利用者を受け身にせず、全員で参加するイベントにしていきたい。
- 共働きや定年延長の影響により、学校の見守りなどの地域のボランティアが高齢化している。

## ③ 参画・公的補助

- 少子高齢化が進む中で、地域で活発に活動する高齢者、アクティブシニアの存在が注目されている。
- イベントや観光事業などでも、アクティブシニアと協働していくことが必要となっている。
- シニアだけでなく、子育て世代が社会的活動に参加できるよう、イベントや観光事業のPRを積極的に実施していく必要がある。
- 地域活動の担い手が高齢化、固定化している。
- 自治会等地縁組織が弱まり、活動中止など存続の危うい状況が顕著になっている。
- 子どもの医療費や給食については、大阪市など他地域と比べて整っている。
- 団塊の世代が地域回帰により、各施設の利用やボランティアの参加が一時的に増加したが、人手不足や不況により、再度仕事に戻った結果、施設での活動が減少した。
- NPOはボランティアマインドが大きく、ビジネスとしてファシリテーションを行うことなどへの理解が得られにくい。
- ボランティアは活動した対価について考えることで意識も上がるのではないかと。できることも増える。
- ボランティアマインドで無償でも活動する気持ちでいるが、補助金、助成金は人件費として使えないので困る。ひょうごボランティアプラザは割合が決まっているが、人件費として使える。
- なくても困らないもの、あってもなくてもどちらでもよいものは淘汰されていく。
- 尼崎市で消防団に入っているが、行事の9割が必要ないと感じている。視察のための訓練などはないと思う。

- コロナ禍で、急に助成金が見直しになった。小さい組織は助成金がないと意欲はあっても予算的に難しい。
- 行政の考え方は、3年を目処に助成をして、後は自分でやっていくことが方針なので、商店街の会長、執行部はよく考えなければならない状況である。
- 「県民交流バス」の助成金は、年々縛りがきつくなり、半年以上前に申し込まないといけない。助成額も少なくなっている。地域の活性化を目的としているので、助成ありきで行っているがいろんな意見があり苦労している。
- 神戸市では、来年度から物品入札の仕組みが変わり、東京の大手資本も参入可能となると聞いている。
- 猪名川町ふるさと館は無料で開放されて人気があるが、飲食店等の出店が可能になれば、より集える場所になる。

## ④ 世代間交流

- 交流はボランティア活動の基本行為であり、各地区で他方面にわたって実施したが、単発的で一過性であった。
- 楽しそうと思えば活動には参加してくれる。PTAも積極的に盛り上げる役員がいると、翌年は役員の選出は候補で役員が決まる。活動的な人を巻き込みたいが、忙しい人が多いと難しい。
- イベント参加者の多くが祖父母と孫世代で、中間年齢層の若者・親世代の参加が少ない
- 地域の清掃に参加しても交流がない。

## ⑤ 外国人との相互理解

- 外国人と日本人、または外国人同士が交流できる機会や場が十分でない。
- 外国人を支援対象として扱うばかりではなく、外国人の社会参画を促し、自身も社会の構成員の一員であると意識づける必要がある。
- 外国にルーツのある児童や生徒に対し、日本語学習と、母語や母国文化の継承の両立が必要。
- 出身はブラジル。母国との違いを感じる点は、日本では、学生の頃から画一的に教育されており、箱に入っている印象がある点。周りと同じように考え、表現するように教育されている。ブラジルでは、自然と個性がプラスされる。
- 他言語の表示があるが、英語を選択すると、情報量が日本語表示の半分くらいになってしまう。
- ロシアから来ている。子どもの勉強のことについて、日本ではサポートが手厚くて助かる。
- 20年以上住んでおり、帰化している。これまで商社、コンサル、メーカー勤務などをしてきた。市民ベースでは地域住民として扱ってくれるが、役所、裁判所、警察署等では、横柄な態度をされたこともあった。おそらく、日本では、「共生」という考え方が薄い。

- 日本で10年住んでいる。2002年に初回で日本に来た際、通訳士やサポートしてくれる人はいくつて仕事を探すが難しかった。2回目に日本に来た際、通訳士もいたし、子どもが学校に慣れるためのサポートもあった。病院に行くときも、通訳士のサポートもあった。市役所にも行きやすかった。
- 日本人は助けてくれる。道を教えてくれるとき、「一緒に行きましょうか」などと言ってくれる。一方、近所の人からは、私たちが日本語を勉強する気持ちがないのかと思われていると感じることがある。勉強したい気持ちはあるのだが、仕事をするのが一番なのでどうしても後回しになってしまう。
- 日本人はほかの国のことをあまり知らない。アメリカにしか興味が無い。私がスペインのことを話していても、興味がなさそうで寂しい。
- 日本に来て良かったのは、子どもの勉強に対して厳しいところと、伝統があること。スペインでは、病院が無料であるが、日本では有料なのが驚いた。
- 日本にいて困ったことはあまりないが、母は日本語がわからないので、全部私が通訳する。
- 日本国籍がないから、日本人と同じことがあまりできない。外国人であることによって、差別ではないが、私たちと関わらないのをやめようと思っていると感じることがある。
- 2050年を見据えて色々考える際、まずは目先の問題にも対処していかないといけない。
- 中国では芦屋市に住んでいるだけで憧れがある。税金が高いのではないかと、上品すぎて住みにくいのではないかととも言われる。
- 免許更新の際、妻は日本語がわからないので困った。
- 多文化共生については、以前は、国や研究機関のレベルでしか使われていない言葉であったが、最近では私たちボランティアのレベルにまで広まってきている。今が、多文化共生のスタート地点であると感じる。
- 2年くらい前から当団体が数学など理系の勉強を子どもたちに教えている。日本語でとまってしまう子どももいる。言葉の問題を感じる。
- 多文化共生については、以前は、国や研究機関のレベルでしか使われていない言葉であったが、最近では私たちボランティアのレベルにまで広まってきている。今が、多文化共生のスタート地点であると感じる。
- 2年くらい前から当団体が数学など理系の勉強を子どもたちに教えている。日本語でとまってしまう子どももいる。言葉の問題を感じる。
- 近所に、住んでいる外国人に、言葉や料理を教えてもらうだけでなく、生き方を教えてもらうという印象がある。一緒に楽しむことが重要。外国に行かなくても、こうした海外文化に触れることができるのはチャンスかもしれない。
- 近所に、住んでいる外国人に、言葉や料理を教えてもらうだけでなく、生き方を教えてもらうという印象がある。一緒に楽しむことが重要。外国に行かなくても、こうした海外文化に触れることができるのはチャンスかもしれない。
- お互い支えながらやっていく。外国人の中には、地域の中で何かできることを模索している人もいる。
- メールで会員の方に案内した際、漢字とふりがなの両方で連絡するのだが、皆さんに理解してもらっているかが不安。投げかけてもレスポンスがないことや、今日でも時間ぎりぎりまで皆さんが集まらないことなど、日本文化に長くいる私にとっては不安を感じる。
- 日本人は、何でも考えすぎである。
- 日本語学校に通っていた際は、教える側とは何となく心理的な距離を感じた。当団体では、距離が近い。

- 地域で色々したいと感じている外国人の人が多いということを感じる。
- ラテン系の人たちは、いつも心の距離を近づけようとしている。仕事を始めたときは言葉がわからなかったけれども、気持ちを近づけようとすればジェスチャーなどを通して伝わるものだ。
- 編み物など家でしているが、日本語の問題もあるので、人に教えるまではいかない。
- 世界中から人が集まっている。学ぶための良いチャンスである。
- ロシアの餃子を作る会を開いたロシアの方もいる。作り方のみならず、どのように楽しむか、どのように生きるかなどについて勉強になった。
- 多文化共生を考えるとき、どれだけ市政に反映されるかが大切。永住資格を得ている定住外国人に選挙権を与えることは、市町村レベルでは禁止されていないとされているが、実際には、選挙権を与えている市町村はない。
- 女性参政権を与えられたのは75年ほど前のこと。
- 外国人が日本に入ってくることに、私は怖いイメージがある。日本の魅力を知ってもらうのはよいことではあるが
- 多文化共生については、以前は、国や研究機関のレベルでしか使われていない言葉であったが、最近では私たちボランティアのレベルにまで広まってきている。今が、多文化共生のスタート地点であると感じる。
- 2年くらい前から当団体が数学など理系の勉強を子どもたちに教えている。日本語でとまってしまう子どももいる。言葉の問題を感じる。
- 近所に、住んでいる外国人に、言葉や料理を教えてもらうだけでなく、生き方を教えてもらうという印象がある。一緒に楽しむことが重要。外国に行かなくても、こうした海外文化に触れることができるのはチャンスかもしれない。
- 尼崎市と尼崎市国際交流協会が資金を出し合い、尼崎市の高校生を1ヶ月間、海外にホームステイさせる事業をやっている。その経験者で、貧困国の人々を助けるボランティアをやったりして、事業としての有効性を感じるが、資金が先細りしている。
- ベトナム人の文化、風習も特異で、幸せが出て行かないように、また悪霊から守るために高価な物を身につける風習がある。
- ベトナム人の方々は生活文化が違う。洗濯物が多く、家の庭の雑草は生えたまま、草刈りなどしないようだ。日本人社会からは孤立し、地域に溶け込んでいない。地域の方と交流できていないし、求めているように思う。

## ⑥ 少子高齢化

- 活動の後継者がいないことも問題である。
- ニュータウンで高齢化が進んでいる。
- 農業ボランティアに入ったが、高齢者が多く若者が非常に少ない。環境を守りつつ、定年退職後どうするか。高齢者が引きこもることもある。
- 高齢者の交流の場が減少し、街角での交流が必要である。
- 交流のために植木やベンチが必要である。
- 芦屋の奥池周辺でも高齢化が進み、空き家も増えている。
- 活動の後継者がいないことにも問題である。裕福な若者などはおらず、時間もお金も集まらない。「持ち出しのお金を出してまで人のために動くのか」との疑問もあり、役に立ちたいけど・・・という意識の狭間でモヤモヤしている。
- スポーツインストラクターをやっているが、スポーツジムの会員も高齢化している。平日に集まると高齢の方が多いが、得るものはある。
- ニュータウンで高齢化が進んでいる。子どもを巻き込んで「ふるさとづくり」を行っているが、ニュータウンには伝統行事がないことから、人と人のつながりを維持していくことが難しい。
- 65歳で自治会の班長をすることになったが、会社勤めをしていると時間がなくてできなかっただろう。20年後のことを考えると、東京にいる子どもは70歳まで働かないといけなのではないかと言う。
- 弁当を配達しながら高齢者の安否確認をしつつ、必要に応じてケアマネージャーや家族に報告している。
- 5年ほど前から、地区が高齢化しているが、新しいことをするチャンスである。栄えていくまちと自然環境の両方を生かしていきたいが、自然環境を守ることは個々ではできない。川西市には林業がなく、誰も手入れができなくなっている。

## ⑦ ユニバーサルデザイン

- バリアフリー設備やLGBT当事者も使いやすい施設の整備が求められている。
- 交流の場所である公立施設の老朽化問題がある。

## ⑧ つながり

- 孤独死や空き家の対策が必要である。
- 非正規雇用に伴う賃金格差の問題がある。
- 生活困窮による要援護児童・生徒が増加している。
- 外国人などいわゆる「弱者」に対し、今回の新型コロナウイルスを含め自然災害などの対応が十分に行き渡らない。
- 当団体では現場に出向くことで、相手方の趣味、家族構成、人間関係などの多くの情報を得ることができる。

- 市内の全てのNPO等団体に、2年に1度は何うようにしている。訪問によって、解散している団体登記のない団体などが判明する。また、「理事長が亡くなって、その後どうすればよいか。」などの相談も受ける。
- 行政からの通知(要請)は自治会を窓口にはできるが、非自治会員への情報伝達に支障がある。
- 以前は集落の周りに農地や耕作地が広がり、住人は農家の人たちがほとんどであった。今は、職業も知らない人達が集落の中に生活しているため、挨拶はするが交流する事はあまりない。
- 「○○CAFE」からプチレッスンで自分を披露し、そこから広がり、イベントを行っている方もいる。
- 顔を合わせていないと、人が埋もれていく。
- 年2回市内全自治会による地域清掃としてクリーン作戦は定着したが、参加者が高齢者中心のため学校等の学生や若年層の参加体制をつくる必要がある。
- 地域役員も高齢化傾向にあり、交代しにくい。
- 当団体は営業活動して広告費を徴収し、住民に還元している。この活動は珍しいようなので、我々の活動内容を聞いてもらう機会を設けてもらいたい。
- 尼崎は熱い人がたくさんいて色々なことに取り組んでいるが、なかなか市民には行き渡っていない。
- 共創というスローガンを掲げ、地域との連携や他団体との交流を図ってきた。
- 共助については、これから30年活動の課題になると考える。住環境を支えるのは、地域の自治会や地縁団体といった地域コミュニティである。ただそれらの団体も永続的に発展するわけではなくて構成員の減少や高齢化といった様々な課題を抱えている。
- 地域で活動する様々な団体が、組織の維持、拡大に取り組んでいるが、自治会が高齢化が進み、担い手も減っている。
- 高齢化、未婚化、少子化が進むと、社会福祉協議会、民生委員、主任児童委員とか保護司等の社会の安心安全を担保する担い手が減少していくのではないかと心配している。今は女性も社会に進出しているし、なかなか受け入れる人がいない。
- 地域活動に参加したいと思う若者の割合がだいぶ少ないという調査をみた。
- 高齢層を中心にムラ意識が根強いが、次世代層は市町などの自治体単位を超えて連携する動きが活発である。
- ハロウィンのイベントでは地域の企業とつながりママがスタッフとなり、パパも参加するなどし、規模も2千人となった。
- 当社(ホテル)が建築されるまでは、立地条件が全てであるが、建築後は、その地域とのつながりを大切に営業している。

## ⑨ 福祉

- 施設利用者が園芸作業中は、近所の人と挨拶する。
- 介護業界のマンパワー不足だが、介護職員の処遇改善により収入がアップした。
- 次世代の担い手がない。

- 若い人が自治会のニーズを感じていない。
- 施設入所の基準は要介護2から要介護3になり、介護予防サービスは市町に移っている。市町の財政力の差が出る。介護予防サービスの支出が、介護保険の支出がいつまで続くか疑問である。
- 訪問介護を在宅介護サービスの担い手としてどこまで使うか。財源の問題で、生活援助から身体介護に移っていないか。
- 住みたい街ランキングの上位に選ばれているが、貧困層が増えている。家庭の経済事情で子どもの人生が変わってくる。
- 地域一環の施設として、見てもらえるようにしないとイケない。近隣住民が困ったときの助けとなる存在にならねばよい。
- 介護の問題は簡単に施設に入れればよいとは思えない。田舎では介護の手が回っていない状況。交通手段も無くなっている。
- 就労継続支援施設の利用者が自立した生活を送ることができていることが理想だが、現実には難しく、利用者それぞれ独特の距離感がある。
- 精神障害は外見からは分からず、周囲の理解を得ることが難しい。
- 就労支援施設の利用者それぞれが「自助力」を高め、自信につながるような居場所(作業所)は必要である。

## ⑩ 情報通信・技術

- 人や地域のつながりがテクノロジーの進化でどのように変化するか想像がつかない。
- 若者はIT、テクノロジー関連業種に就業希望がある。
- 行き過ぎたコンパクトシティは郊外の自治機能の崩壊を助長し、社会資本が流出する可能性が高い。
- オンライン会議は、子どもがいる人や、帰宅してから公民館に出向く間に合わない方が参加できるなど好評である。
- 議会で、「支援が必要な高齢者の方に災害用のタブレットを貸し出す」と言っていた。アラートが配信できるようだ。
- ライン等の操作方法について一緒に教えてもらうのをセットすればよいのではないかと。
- 当団体は4人で運営している。名刺を持っていない、フェイスブックの使い方が分からないなど困ったことについてお手伝いしている。
- エアラジオ(YouTube動画)でお店の料理を紹介しつつ、情報を発信している。地域と交流したいとの要望があり、川西市の寺とカフェを開催した。さまざまなSNSで情報発信をしている。先日はNHKが特集してくれた。小さい団体でも活動を知ってほしい。猪名川町にはこの場所の使用について調整してもらったし、今までにイベントの場所を確保してもらったこともある。
- 隣にドイツ人が住んでいる。ポケットで問題なく会話できている。

- 5Gの普及などの情報通信技術の一層の発達が見込まれる。
- 社会が変化し、リモートワークが進んだ。中小企業でも全国的に戦える力があり、活躍できるチャンスもある。
- コロナでテレワークが加速している。大前提は通信インフラがどれだけ充実しているか。テレワークが進むとどこに住んでもよい。住む場所を選ぶとなると通信環境が重要になる。
- ・実際に通勤しているからこそできることはある。例えば、同僚、同級生、先輩や後輩などの繋がりは自身が仕事をしていく上でモチベーションに繋がる大事なものである。これがリモートになると、今までのようなフレンドリーな関係や会社の中での信頼関係が築けないなど、繋がりが薄くなるというデメリットがある。
- 5Gという言葉だけが先行して実際どう使って何をするかはよく分からない。
- 東播磨でローカル5Gを使った「HYOGO情報通信基盤未来都市整備モデル事業」で、積極的にテクノロジー導入をしていると勉強した。
- 無料で使えるアプリケーションが増え、お金をかけずにいろんなことができるようになったため、デジタルデバイドの問題があり、できる人とできない人の格差が広がる一方である。

## ⑪ 防災減災

- 台風21号で芦屋浜から西宮浜が被害が出て大変なことになっている。六甲山から被害が一望できるので、機会があればみてもらうことも大事なのではと思う。
- 阪神・淡路大震災から25年を迎えたが、多くの若者が震災を経験していないため、今後発生する確率が高い南海トラフ地震、また近年多く発生している自然災害に対して、恐ろしさと備える大切さを伝えていきたい。花火大会という市民が喜んでくれるツールを使って、そのメッセージを届けるため開催した。花火は、西宮市の犠牲者数にあたる1,146発を打ち上げた。
- 伊丹市は地勢的に自然災害が少ない地域であるため、日頃の災害に対する危機感が少なく、発生時に向けた備えの意識が希薄である。
- HUG、心肺蘇生法、家具固定について講話をしているが、参加者の高齢化が目立つ。
- 高齢化に伴い自治会やボランティア等の地域活動の担い手が減少し、自主防災会の活動範囲が限定的で会員以外を含める小学校区など広範囲の活動が難しい。
- リタイア後の再就職者が増加し、「いざ、もしも」のとき、活動できる人員確保が難しい。
- 個人情報に対する規制で、取り扱いに苦慮している。



## ① 外国人労働者の受入れ

- 外国人が建築士の資格取得を目指すに当たり試験問題が日本語しかないのが支障となっている。
- 外国人労働者の生活支援が多くなっている。ベトナム人は日本で子育てがしにくいと感じる人が少なくないのかもしれない。

## ② 人材確保・雇用

- サービスの担い手を民間から生み出し、財政負担を減らす、いわゆる協働活動ができるとよいが、人材不足により協調性のある年齢層が少ない。
- 企業誘致など、東京圏に対して競争力をつける。
- 働き方改革や定年延長などにより労働力の高齢化が進み、耕作放棄が加速している。
- 大阪の統合型リゾートIRが完成した場合、私が特に気になったのは、3万人から7万人にかけての新たな雇用が創出されると言われていることである。
- 工学系の短期大学は全国的に減少傾向にあり、時代遅れという方もいる。短期大学では、2年勉強した後、適性を考えたうえで、卒業生の2割位が4年制大学へ編入するなど堅実な進路選択に繋がっている。先般も県立大学に編入学生の受け入れについて陳情に伺ったところである。
- 採用側の問題であるが、中小企業では優秀な学生を確保できない。採用しても、5～6年すると辞めて他の企業に移ってしまう。
- ホテル業界では現在の求人倍率は低いものの、以前は人手不足が続いていた。出入りの激しい職種であるが、給料や福利厚生面だけでなく精神性を大切にしてくれる社員を求めている。
- 最近の新規採用者は、明らかに女性の方が優秀で、目的意識がしっかりしている。来春の採用予定者の男女比は、3対7と女性が男性を上回っている。

## ③ 交通機能の整備・安全対策

- 地形上、阪神地域は南北の移動が不便なため交通政策が必要である。(デマンドタクシー等の導入。将来を見据えた自動運転による移動サービス等の導入実験)
- 南海トラフ地震時の被害が東西の広範囲に渡って影響する。
- 高齢者の社会参画、労働参加の必要性が高まっているため、移動手段の確保が課題。
- スーパー閉店に伴う買物難民の増加や寂れる中心市街地の問題がある。
- ラストマイル問題(バス停から自宅までの移動手段がないこと)が発生している。
- 学校統廃合に伴う通学手段の確保が課題。
- 人口減少や高齢化が進む農村部や傾斜が多い山手地域では、誰もが移動しやすい交通環境が求められているが、バス路線の維持が困難となっており危機的な状況である。
- 道路が慢性的に渋滞している。(阪神高速、尼宝線等)
- 買物難民を防ぐための高齢者の買物支援が必要。
- サイクルマップはあるが、スポーツサイクルを借りることができる場所(サイクルステーション)がないので、手軽に始められない。
- 県内では播磨中央公園にサイクルステーションができるようだが、県民局エリア毎に1か所は整備が必要。
- 高齢者運転が原因の交通事故率が減らない。
- 自転車通勤に使う人が増加したが、活用できるサイクルロードが少ない。

## ④ 小規模事業者の発展

- 輸送技術の進化などにより鮮度維持が難しい商材が地方産地から量販店の店頭で並ぶようになり、競合する結果、価格低下により専業農家の生活を維持できるだけの所得が得にくくなってきた。
- 南部には大型商業施設や大病院の集中し便利だが北部にはなく不便である。買い物難民の対策が必要である。
- 市民の商店街離れが著しい。
- 農村部の農家や都市部の小規模事業者において、経営者の高齢化や事業承継問題が深刻化している。
- 市内外への大型量販店の進出により小売業等小規模事業者の経営に大きな影響を及ぼし、事業規模の見直しや廃止等が見られる。
- 最近では「新型コロナウイルス感染拡大」や「自然災害」「事件、テロ」といった緊急事態が起きた際、事業資産への被害を最小限に食い止め、中核事業を継続させていち早く事業全体を復旧させるために、平常時や緊急時における様々な対策や方法をまとめた事業継続計画(BCP)が重要となってきた。
- 昔から阪神北地域と阪神南地域では六甲山系を境に市民の交流ができにくい状況があり、中小や小規模事業者等企業間の交流についても同じような状況である。
- 技術の進歩により、経済が発展し快適な暮らしが進んでも、大きな家の高齢者世帯、未婚の若者单身者世帯などが残り、都市と農村における地域格差が広がっていくことを懸念する。

## ⑤ 経済・産業

- 住宅都市としての側面が強く、観光を核とした地域経済の活性化が進まない。
- 阪神地域には、スーパーコンピュータ、SPring-8といったものがない。
- 平成30年に灘五郷の酒がGI(地理的表示)の指定をうけたことから、酒造会社では主として輸出の拡大に注力している。
- 酒米農家では、後継者不足に悩んでいる。
- 農産物の販売が安すぎる。農協は金融業務に偏っている。
- 車の市場にはいつも外国人がいる。相場が高いものを良い値段で買ってもらっているから利益につながっている。
- 宝塚には商業施設が少ない。川西市と比べると多いが、尼崎市の東海道沿線に比べるとオフィスビルは少ない。景観の問題もあるのかもしれないが、宝塚の駅前がもう少し再開発でビルが増えれば、「宝塚市で仕事をしたい」と思っている人はいるのではないかと。宝塚の主要駅にビルがあれば、飲みに行ってお金を落とす。

- ワンコインスタンプラリー事業を実施する。3コイン(500円、1,000円、1,500円)までで、宝塚市内の人の周遊化、経済の活性化のために行う。
- コロナ禍ではあるが、尼崎は元気な印象。大手ゼネコンなどは売上高が前年対比で減少しているが中小企業は確かな顧客がいて、堅調。建設業界は依然人手不足と言うことも聞いている。団体の会員は、少し前までは4,600くらいで、会員数5,000を目指して頑張っている。団体の会員が増えているのは、1つは金融、経営相談を積極的にやっているから。
- 新型コロナウイルスの影響を受けたことで、兵庫県では多くの店舗が閉店に追い込まれ、その数は日本で4番目となる。この社会背景には、兵庫県民の高齢化と苦しい資金繰りの現状である。神戸市は大都市と言われながらも貧困率は高く、他の大都市と比べてもあまり豊かとは言えない。貿易のまちと言われていたが、海外の経済効果享受しているとは言えないのではないかと。
- 川西市については考えてきたが、兵庫県の大きなくくりの中で何ができるか、盛り上げようという意識はなかった。地域で発展させようという考えは間違えてではなく、兵庫県の活力に繋がると感じたとし、県政にも興味を持つことができた。
- コロナの影響により西宮市内でも製造業・小売業や飲食業の9割以上が売上高減少という状況である。様々なアイデアや方策で現状を打破しなければ未来はない。
- 自動車産業のようなサプライチェーンが兵庫県に無い。製造業だけでなく、医療など他の産業においても、中核となる企業をどう育成していくかが課題である。
- 国内の企業を対象にBCPを策定しているが、新型コロナは全世界に広がっているため、海外のサプライチェーンを単独の企業では見つけられず、確保できていない。
- 時代も大きく変わったが、阪神南部は低迷していると感じている。大阪ではグランフロントをはじめ様々なビルが建ち並び、高い賃料を得ている。

- 農業に適した地域が多いが、そのイメージやブランド力が弱い。
- 海岸沿いに観光・散策できる場所が少ない。
- 大阪・京都と比較し、旅行客が少ない(観光資源が少ない)。
- 住みたいまちランキングで上位に名を連ねる西宮市や芦屋市が、住んで良かったまちランキングでは出てこないことから、事前期待度を上回る施策が打てていない。
- 地域資源の観光化・インバウンド対策が必要。
- 北摂地域に関してサイクリング目線では、自然が豊かである。交通量が少なく適度なアップダウンがある。
- 大阪市から川西能勢口まで20分程度で、空港(伊丹)からもアクセスがよく、インバウンドが未知数ではあるものの、サイクルのレンタル場所がないなど、地域外から来る人の受け入れ体制がない。
- ゴールデンルート上にあるが、単なる通過点である。
- 日本政府観光局の調査では、兵庫県を訪れるインバウンド旅行者の訪問率は、ここ数年変化がない。
- 日本への玄関口である関西国際空港、大阪港から大阪-京都を訪問する俗に言う“黄金ルート”から外れた印象がある。
- 新型コロナウイルス感染症の影響で途絶えてしまったインバウンド対策をリセットするなど、新たな施策を検討するべきである。
- 川西市は、阪急電鉄、能勢電鉄、JRが通っており新名神高速道路のインターチェンジもあり、伊丹空港も近いが、川西市内に観光の目的地になるような場所がない。
- 道路事業に従事する立場から、周辺の環境を変えないように、六甲山、有馬や芦屋のまち、西宮など、観光を支える道路として運営している。
- 六甲山の斜面を削って、一つ一つを丁寧につくった住宅が、芦屋には広がっている。世界遺産に認定されるかもしれないヨドコウ迎賓館もそのうちのひとつである。
- 神社の境内に種をまいて数十年後にもみじのトンネルをつくる活動や、スタンプラリー企画、芸術祭、民話にちなんだ物語イベントなどを行っている。
- 東京から尼崎を見てみると、ダウンタウンや、大阪と甲子園の間ということくらいしか出てこない。観光という点では、阪神間をまったく知らない。
- 2〜3年前、当ホテルの稼働率が100%だったのは、大阪におけるインバウンドのうち、あふれた客の利用があったことが要因である。
- 中国人のホテル利用者によると、尼崎はどこにも便利であるという。
- 尼崎では、良くも悪くも「アマ」という単語が連想される。「アマ」という意味合いは大事で、兵庫県の観光において失ってはならないものではないかと思う。

- 尼崎には、近松、尼崎城、寺町、(具体美術の)白髪一雄氏、商店街など非日常を体感できる空間がある。
- 尼崎の運河は、きれいだけど人がいない。
- グランピングなどのアウトドアが注目されている。災害時に非常に役に立つ経験と思う。昔、宝塚市立「少年自然の家」があり、お酒も飲めて大人も子どもも自由に楽しむことができた。
- 協力できることはやるというスタンスで、このイベントをやって何に繋がるのだろうかという人もいて、やめてしまおうという話もある。
- ロハスがやってきて、川西市でもやってくれそうとラッキーだと思う。どのようにコラボするのが課題である。
- 兵庫県は民泊(住宅宿泊事業)を規制等により始めづらい。
- 「宿泊してでも行きたい」という資源がない。日帰り者をターゲットに空き家や古民家を活用する必要があるが、市街地開発の規制が厳しすぎる。

## 7 まちづくり

- 三田市の町中に学生が集まれるこみんかという基地を構えた。普段会えない大人と学生が話すようになる機会を作ること、学生の人生が変わり、町にとっても新たな化学反応が起こっていく。
- 森の中にレストランを作るといったものは、市街地調整計画により、容易にはきない。
- 三田市は再開発をしようとしているが、昔から住んでいる人は景観や景色を守りたい。飲食店などの再開発が必要だと理解しており複雑な気持ちである。三田の食文化、食の町にしたい、景観を残したい気持ちは理解できる。
- 自分の大学には都市政策系を専攻している人が、都市研究会という町の中での研究やロジックを考えている。三田市のバイトをしている人、こみんかの場所作りをする人、市の総合計画を市民と一緒にやっていくプロジェクトに学生枠で参加する人、三田の田舎の方の地域で活動する人など皆、何かしら繋がりがあがる。
- 淡路島の海岸線沿いにパソナグループが施設を建てており、淡路市民は良く思っていないようだと思う。パソナが荒らしていると言われていたりするが、時代的にも土地を容易に充てる時代でもないのだからだろうか。
- 昔から住んでいる高平に、息子呼び寄せたいが市街地調整区域があり、雑種地に新しく家を建てるのができない。三田市は移住施策に取り組んでいる所にも関わらずである。
- 大阪の人間なので田舎に興味がある。立地がよくアクセスしやすいという点で三田市に魅力を感じている。
- 役場の関係課に知り合いになりにくい。集まりに出向いて、この件については誰に聞いたらよいか尋ねるなどする中で、出会いが繋がっていく。
- 川西市コミュニティ連絡協議会で寄り合いの場が5か所ある。地域の方が先生になって講座を行っている。

- 「えんがわCAFE」は他の地域から来てもよいけど、まちづくり協議会の事業であるからしほりがある。「えんがわCAFE」から広がり、イベントを行っている方もいる。
- 国道43号線から南は森構想のエリアであるが、この地域は主に工場が集積している。一方、国道43号線から北側には住宅地が広がっている。あまりにも、工場集積地と住宅地がはっきりと分かれすぎている。森構想のエリアでは、晴れた日には淡路島から堺まで見えるような所である。
- 「パソナ」が東京から淡路島にきた。淡路島にきた理由は分からないが、三田市に来てもらえるよう魅力のある環境をどうつくっていくか。魅力は人材であり、魅力あるまちを形成したい。少子高齢化による人口減少のなかで、まちづくりや人口が増加するにはどうしたらよいか。
- 各小学校区に「まちづくり協議会」を設立し、将来の地域づくりについて、地域の事は地域で考えている。小さいことから地域の魅力を伝え、住んでいる地域を良くしていく。安心、安全なまちにするため、自分たちのまちづくり、魅力づくりをどうしていくか重要と考える。色々なことを「まちづくり協議会」で、魅力を発信している。それが人口増加に繋がるだろう。
- 農業従事者である。企業誘致をしたいが、調整区域がネックで、家が建たず、企業は市街地調整区域のない市町に行ってしまう。
- 顔を合わせていないと、人が埋もれていく。ホームページに記事をアップしても誰も見てくれないということになる。コミュニケーションにより能動的に自分をアピールすることができる。
- 住宅が密集している伊丹市では、騒音等の問題もあり、イベント開催が難しい。若者が多自然地域に流出する可能性がある。
- まちづくりの担い手は地元商店主や個人事業主が大半で、仕事の第一線から退いた高齢者も多く、活動内容が外から見えづらい。
- 時間や資金、資産を持ち、まちづくりの意欲が高い人が少ない。
- 昔からの運営により住民合意がとりにくい地域があり、問題が複雑化している。若者が活動しにくいと、活動しやすい地域へ移っていく。地域の二極化が起こっているのではないかと。
- 地域のことには「住民も参画しよう」と義務感や使命感を求めただけでは限界があり、地域離れが進んでいく。
- 新しくできたまちは歴史がなく、横の繋がりが少ない。

## 8 魅力発信

- 川西市に住み、事業をしているが、兵庫県内では川西市の知名度が低い。梅田まですぐに行けて、どちらかというとベッドタウンという印象である。観光としてもパンチが少ないと感じている。
- 交通の便が悪いと人が来ない。来てほしいが、騒音等で「人が来ると困る」と言う人もいる。

- 大雨の異常気象による川の氾濫や土砂崩れなど大災害の発生が懸念される。
- 新型コロナウイルスのことで、官と学の連携が十分ではなかった。
- 通年は市民まつりや例会で様々な人と交流し、多様な価値観を育成していた
- 当団体では、この先の豊かな未来に向けて、日々課題解決に向けた活動をしている。
- 当団体のアドバンテージとして、40歳を迎えると卒業するというものがある。なぜアドバンテージかということ、組織で常に新陳代謝が起こり、時代時代に応じた若者の運動が展開できる。
- 大学生や子どもを対象にした事業は、大学生を労働力にしてしまうことが多いが、彼らは能力が高く、財産である。
- 2030年を話すことも辛い状況なので、30年後を考えるのは難しい。
- 将来的なビジョンの話聞いて、共通のビジョンを持ってみんなで力を合わせて同じ方向に向かっていくことは非常に大事と認識している。一方で現在の課題を解決することが、今生きている人が「この地域が良くなったな」と実感できることだと思う。
- 副知事のSNSを拝見すると、コロナ対応についてメディアが報道する内容と、現実とは違っているということを感じた。コロナについての報道を見ると、東京と国が綱引きをしているように見える。権限や責任がどこにあるかがわからない。

## 10 空き家の防止対策と利活用

- 阪神地域南部(都市部)と北部(山間部)において、空き家問題に対する意識の違いがある。
- 南部は一般的に「売れやすい地域」であり、空き家問題に関しても流通に関することより相続や隣地トラブルによるものが多い。
- 空き家は表面化した時には既にまちの環境を損なっている。
- 両親をこちらに呼ぶと、実家が空き家になるのが心配である。
- 都市部では空きスペースを確保するのに費用がかかる。
- 住民減少により空き家が増加する。
- 芦屋の奥池周辺でも高齢化が進み、空き家も増えている。
- 空き家の問い合わせがあり、移住希望者は多いが物件が足りない。